

同志社教育のヴィジョンを求めて

井 上 勝 也

本学では今出川・新町校地の狭隘、体育施設の不備が叫ばれて久しいが、現在田辺に中心校地の一二倍 (97,111) という広大な土地を整地し、同志社二〇〇年の夢を賭けようとしている。新校地を含めての同志社教育のヴィジョンとその実現は、我国の高等教育の現状及び将来的展望をふまえ、私学同志社の独自性を強調しながら、国際的視野で考えねばならないことはいうまでもない。

この小論に与えられたタイトルは「同志社教育のヴィジョンを求めて」であるが、上記のように、我国の高等教育の現状及び将来的展望をふまえた上で、私の「同志社教育のヴィジョン」を開陳しようと思う。高等教育の現状及び将来は本学の現状及び将来と深い係わりがあり、現状を無視したヴィジョンは「幻影」であって、「未来像」にはならないからである。

I 高等教育の現状

(1) 我国の高等教育は戦後、産業、経済の発展とともに急成長し、一九六〇年には一八歳人口の大学・短大への進学率は一〇・三%で

あったものが、六五年には一六%になり、七〇年には二四%、七六年にはついに三八・六%に達した。その後漸減して本年は三五・五%にとどまっている。このような高等教育人口の急増の結果、一九六〇年に大学二四五、短大二八〇合計五二五校であったものが、一九八二年現在では大学四五五(うち私立三三〇)、短大五二六(うち私立四三九)合計九八一校の多くを数えるに至っている。かかる数量的拡大の重要な担い手が私立大学であり、高等教育人口の七六%を担っているにもかかわらず、私学の教育・研究条件は、国立大学のそれと比較するとき、絶対的、恒常的格差が存在することに啞然とせざるをえない。即ち私立大学の教員一人当りの学生数は国立の三倍強、学生一人当りの校舎面積は国立の三分の一、学生一人当りの教育費も国立の三分の一、学生負担額は国立の三倍、学生一人当りの国費負担額は国立の一〇分の一、教員の持ち時間は国立の六〇%増という劣悪な条件のもとで、私立大学の教育・研究が進められているのが現状である^①。

(2) カリフォルニア大学バークレイ校のトロウ (Martin A. Trow)

教授は、『現代産業社会における高等教育の性格とその発展過程』という著作を公けにし、高等教育制度の発展過程をエリート、マス、ユニヴァーサル三段階に区分し、それぞれの段階の高等教育の構造的な特性を明確にした。トロウの分析によると、我国の高等教育がエリート型（進学率が一八歳人口の一五%まで）からマス型（同一一五%～五〇%）に移行したのは一九六〇年中葉で、学生数の増加という量的な問題は単に学生を収容する校舎や教職員を数量的に整備することで事足りる問題ではない。量的な変化は必然的に質的な変化を惹起する。例えば学生の進学動機、学力、学問に対する関心・態度、学生集団の性格に変化がおこるだけでなく、高等教育の目的、機能、構造、規模、教育方法、学生と教師の関係、大学の管理運営方式等にも質的な変化が現われる。

我国の高等教育が一九六〇年中葉以降、急激な量的・質的な変化を受けていたにもかかわらず、量的対応に迫られて、質的に十分な対応がなされないまま、ひたすら伝統的な機能に固執していたために、一九六〇年代後半の大学紛争を招く一因になったといえよう。本学も決して例外ではなかった。一九六九年六月から半年間大学の機能が完全にマヒし、その後遺症は長くつづいた。各学部、学科で多くの改革案が出されたが、大学紛争が沈静化する中で、それは棚上げされ、いつの間にか改革の取り組みは意識の彼方に消え去った感が深い。当時のラディカルな学生の大学・教員につきつめた改革要求の中には謙虚に受けとめなければならない問題もあったのである。

欧米の高等教育機関が「危機と革新」の八〇年代を迎える中で、

我国の高等教育機関は、本学も含めて、革新・実験なき繁栄の一九六〇年代を過ごし、七〇年代も革新と実験を回避し、八〇年代も安定と沈滞の時代を迎えているのではなからうか。

高等教育機関としての大学は決して象牙の塔ではない。産業、経済、社会、国家、世界の動きに影響を受けるし、それらに影響を与えることを使命とする。にもかかわらず、戦後の我国の高等教育機関は内的、外的条件の変化にダイナミックに対応してこなかった。

試験地獄から脱出して、憧れの大学に入った学生に、現在の同志社大学はどのように映っているであろうか。彼らにとって現実の大学はバラ色の楽園とは正反対に、無味乾燥な砂漠に映るのである。二回生に一年間の大学の印象を問うと、次のような不満が噴出した。まず学生数の多さ、狭いキャンパス、施設、特に体育施設の貧弱さ、高校の延長のような語学の授業、大教室での一方通行的なマイク講義、退屈な一般教育の授業、出席者が登録者数の三分の一に減るクラス、休講の多い科目、授業に出なくても優がとれる科目、教授法に工夫のない授業、やる気のない学生・教師、授業中の私語、返却されないレポート・答案等々。これらの不満は極めて真面目な学生からのものである。学生を教室・大学から遠ざけ、クラブ活動やアルバイトに専念させる責任の半分は大学・教師側にある。教育機関としての大学の空洞化を認めねばならないであろう。

II 高等教育の将来

高等教育の将来予測は経済の動向や人口動態、国民の高学歴志向、国家の高等教育計画や国家財政等と密接な関係をもっている。

高等教育の将来予測の研究が進んでいるアメリカの例をまず紹介したい。

アメリカでは一九六〇年代前半から七〇年代にかけて不断に上昇してきた一八歳人口が八〇年代初頭をピークとして九〇年代中葉までに約二五%も減少するという人口構成の変化が予測され、高等教育への就学者数の変化予測が最大の焦点になっている。そしてこのような一八歳人口の激減と七〇年代に始まった進学率の低下の中で、どのようにして生き残るかをめぐって、三〇〇〇近い大学・短大は自己変革の努力と大学の個性・特色づくりで躍起になっている。一九八〇年、カーネギー高等教育政策研究委員会が『三〇〇〇の未来—今後二〇年間の高等教育』と題する報告書を公けにし、大きな反響を呼んだ。この報告書は慎重に二つの相反する見方、樂觀論と悲觀論を検討した上で、全体として悲觀的な見方をとっている。即ち大学・短大が学生の獲得に積極的に努力しても、高等教育人口は五一—五%減少するであろう。そしてアメリカの高等教育機関の生き残る道は伝統型 full time の学生の他に非伝統型 part time の学生—社会人を開拓することに向けられるべきであるという。そしてその背景に社会人の学習要求の高さと社会の学習社会 learning society 化の進行を挙げている。^④

以上はアメリカの大学に見られる一八歳人口の動態変化に対する姿勢であるが、我国にも一八歳人口の急増・急減現象が近い将来起こり、大学に安逸なまどろみを許さない厳しい状況が差し迫っている。というのは、戦後第二のベビー・ブームで生まれた子供たちが一九八六（昭和六〇）年に一八歳に達し、八年後の一九九二年をピークとして、その後急激に減少するとの人口動態予測がある。そこで二〇〇〇（昭和七五）年までの一五年間のうち、とくにその前半に重点をおいた我国の高等教育計画の最終報告書を本年六月、大学設置審議会高等教育計画専門委員会が公けにした。この報告書の特徴は、我国の高等教育を質・量両面からの整備に分け、凡そ次のような共通理解を前提にしている。我国は今後より創造的な科学技術の研究、開発が必要となっていくので、高等教育は創造性ある優れた研究者や人材を育成することが強く求められる。また我国の経済、社会は今後技術革新や情報化の進展によって産業構造が高度化し、国民生活においては所得水準の向上、労働時間の短縮、平均寿命の伸長等が進む。このような状況を背景に国民は生涯にわたって多様な高等教育の機会を求め、また国民の教育的・文化的活動への要求が増大するので、我国の高等教育はこれらの多様な要請の適切な対応を強く求められる。^⑤

報告書は以上のような共通理解を基礎にして、質的向上及び時代・社会の要請に応えるための三つの視点を挙げている。

①開かれた高等教育機関であること。学生の多様な教育的要請に対応するために、同じ種類、異なる種類の高等教育機関相互にも開かれ、学生が授業を自由に聴講しうる方途を講じること。また生涯教育の観点から社会人にも門戸を開き、地域の多様な要請にも応えること。

②高等教育の国際化。諸外国との交流を円滑に実施しうる体制を整備し、多数の外国教員、研究者、学生の存在が日常化するような状況をつくることが我国と諸外国との相互理解を深める上で重要

である。

③特色ある高等教育機関であること。我国の高等教育機関が設置目的や歴史的背景、立地条件等が異なるにもかかわらず、画一化の方向が見られることは、機関の個性、特色を失い、ひいては質的停退をもたらすとの理解に立って、教育課程、教育方法、入学者選抜等で個性、特色を発揮した教育研究活動を展開すること。今後の大学の整備は教育研究上の必要性や社会的要請の変化等に適切に対応していくために、既設の学部、学科、一般教育課程等の学内組織の柔軟化や再編成をおこなうこと。近年の大学設置の動向から、人間科学、国際関係、情報関係等の学際的あるいは総合的な学部の設置が考えられる。

以上が質的向上及び時代・社会の要請に応えるための基本姿勢の骨子である。

それでは急増に対応する量的整備はどのように考えられているか。一八歳人口が一九八六（昭和六〇）年に対前年比二九万人の増加を見て、一八五万人となり、一九九二（昭和六七）年には二〇五万人に達する。それで降急減し、二〇〇〇（昭和七五）年には一五一万人（ピーク時に比して五十四万人減）になるものと予測される。そしてピーク時までの進学率を一九八三年度の三五・六%と想定し、八六年から九二年までの急増の七年間に恒常的な定員増四万二千人と期限付臨時定員増四万四千人計八万六千人の定員増で対処しようとしている。これらの定員増の大部分を私立大学が負うものとし、ピーク時の一九九二年には現行定員の一・五倍（や弾力的）を限度として認め、二〇〇〇年には定員超過率を一・一倍程度にすることを考えて

いる。

報告書は最後に国庫助成について触れ、「私学の教育研究条件の一層の向上を図るとともに、それぞれの高等教育機関の個性化、地域配置の適正化、時代の要請に応じた学部、学科の改組転換を促進する方途について検討すること」とあり、経常費の一律補助方式から重点補助方式に移行することをほのめかしている。一五年間の高等教育計画の後半部分（一八歳人口急減時代）については、「計画期間内の適切な時期に策定する」とあり、急減対策に触れていない。私学は八年後に始まる一八歳人口の急減という厳しい試練に耐え抜くためには、国家の高等教育計画を待つことなく、独自の対策をたて、万全を期する心構えが必要であろう。

III 同志社教育のヴィジョンを求めて

I、IIで述べた我国の高等教育の現状と将来は本論への導入である。既にIで指摘したように、我国の高等教育は戦後長い量的拡大の時代を経過してきた。時代、社会が大きく変化し、高等教育人口の飛躍的増大は、大学に量的変化のみならず質的变化をもたらした。にもかかわらず、大学は質的变化への対応を求める内・外の働きかけを看過し、現在に至っている。我々大学人は大学が二〇年も前にエリート型からマス型に移行していることをまず認識しなければならぬ。

本学には学問的意欲に燃える学生が存在するのと裏腹に、不本意就学者が在籍している。このような現状を直視し、その中で大学人は何をなすべきかを真剣に考える必要がある。ここでいう不本意

就学者とは、本学の場合、学力も低く、やる気のない学生は少なく、むしろあまりにも苛烈な長い受験競争にエネルギーを使い果たして、ゴールにたどりつき、しばしのまどろみを求めようとする学生と、本学が第一志望ではないために、横向き、後向きになっていく学生などを意味する。これらの学生にどのようにして眼を覚まさせ、やる気を起こさせ、学問の面白さを、生きる意味を、同志社大学の学生としての自覚を促すことができるか。このような努力は今一度「大学教師とは何か」という問いを自身に投げかけることにつながる。研究者であるとともに教育者であること、いな、現状のようなマズ化した大学では、むしろ後者に重点が移行しつつあることの認識が必要であろう。

我々同志社人が田辺の有効利用をはかり、二〇〇年に向けての同志社のヴィジョンを求めようとするとき、以上に述べたような大学の現状認識、将来展望及び教師の自覚が大前提である。

一七年前から始まった本学の田辺移転問題は、大学設置規程にもとづく中心校地の不足を解消するためという理由だけであろうか。勿論これが大きな理由であった。しかしながら田辺の有効利用は単に空間問題の解決を目ざすものではない筈である。

本学の創立者新島襄は明治二三年という我国が名実ともに近代国家としてスタートしようとする年を期して、同志社大学の設立を意図していた。彼は明治一四年にその企図を明らかにしたが、具体的には翌年「同志社大学設立之主意之骨案」を公けにし、明治二一年の「同志社大学設立の旨意」に至るまで、数回にわたって改訂した設立趣意書を公けにした。合せて設立のための情宣、募金活動を病

軀に鞭打って押し進めたのである。

今回の二一世紀に向けての田辺移転は、新島がやったような内外のコンセンサスをうるための努力が、残念ながら十分になされたとはいえない。多くの人々から何のための移転か、ヴィジョンがないと批判される所以である。不確実性の時代といわれる現代において、将来を展望することは困難である。しかしながら、既に広大な整地上に具体的な建物が建てられようとする現在、遅きに失すとも思われるが、同志社の存亡を賭けた田辺の有効利用について、同志社人はもう一度真剣に考え、自身のヴィジョンをもつことが緊要であろう。私学に宿命的な財政問題を考えるとき、容易ではないが、同志社の一員として、日常の教育・研究活動を通して、その実現をはかる努力がおしまれてはならない。

一九八六年四月からスタートする田辺校地での教育活動は、当面一・二回生を対象としたものである。本学では楔型のカリキュラムを採用し、学部によつては三・四年次にも一般教育科目を履修するよう指導している。しかし殆どどの学生は現実には二年終了時まで一般教育科目(語学、保健体育を含む)を履修し終わるのが現状である。

戦後新制大学が発足し、旧制大学にはなかった一般教育科目が導入され、専門職業教育とともに、人間教育の重要性が叫ばれた。既に三〇数年、今では新制大学の特質であった一般教育は風化し、その軽視はついに廃止論にまで発展している。しかし一般教育が大学の中で不必要になった訳ではない。いな、むしろその重要性を増しているときさえいえよう。科学技術のめざましい発展、情報の氾濫、

学問の発達、専門分化、核競争が危惧される中で、現代ほど専門バカの存在が危険視される時代はない。例えば生物学、物理学、化学、医学、生理学の有機的総合の上に成立する生命科学は、その成果として遺伝子の組み換えや試験管ベイビーの誕生を可能にし、人間の尊厳、人類全体の運命を左右することができるとまで成長した。このような生命科学は生命哲学、生命倫理との結合をまって、始めてその暴走を阻止し、研究成果の平和的利用が可能になるといえる。

我国の教育は伝統的に知識の教授に重点がおかれ、知識を駆使して創造活動をおこなう主体の形成がおろそかにされてきた。大学は単なる知識の切り売りの場であってはならない。新島襄にもっとも大きな人格的、学問的影響を及ぼしたアームスト大学のシーリー(J. H. Seelye)教授が *Amherst aims to teach its student how to think for himself.* といみじくもいったように、自分で考え、批判し、問題を解決する力を身につけた広い視野をもった人間の育成こそ、一般教育の、そして大学教育の大きな目的である。しかしながら、現在の一般教育は前述のように空洞化が激しく、大学、教師、学生ともに一般教育を軽視するきらいがある。そこで一般教育の復権がはかれるとともに、その重要性の認識を新たにすることが現在強く求められているのである。

ここ数年全国的に一般教育、教養課程、教養部の問題が検討され、改革、改組が進められている。例えば広島大学では一九七四年、総合科学部を設立し、全学の一般教育の立案、実施に責任をもち、基礎的科学研究とともに学際的、広域的研究を重視する。そし

て固有の学生を擁し、四年間一貫した *liberal education* を通して広い人間的教養をもった人物の養成をおこなっている。

本学の一般教育を活性化し、田辺校地での教育活動を充実させるために、一般教育科目の主要部分を担当する一〇〇人を越える一般教育専任者の処遇は今後の同志社教育にとって極めて重要な意味をもつであろう。

愈々、来年入学する学生は一年間、再来年以降入学する学生は大学生生活の前半の二年間を田辺校地で過ごすことになる。田辺は、多様な関心をもち、都会志向の学生に、通過儀礼の場ではなく、腰を落ちつけて、充実した学生生活を過ごしうる魅力ある場になるよう配慮されなければならない。大学生生活の前半は今出川校地での後半を規定する。同志社教育は四年間を一貫したトータルなものとしておこなわれるものであり、前半が風化したものになるとき、教育効果は半減するであろう。田辺校地を魅力ある教育の場にするためには、そこで教育活動に従事する教員は、単に今出川校地からの出講気分では動められないであろう。開設される科目も現行カリキュラムの田辺への移行といった認識ではなく、現代社会、時代及び学生の関心を反映したものが工夫されなければならない。とりわけ一般教育科目は、前述したような理解にたつて、大きな改革が求められている。今までの教師の独演的な講義方法をやめ、できる限り学生一人一人が授業に係われるような方法がとれないものであろうか。それがためには大学教員も教授法を研究する必要がある。

本学の入学試験科目の中で、とりわけ英語のレベルは高く、英語は入学後も伝統的に重要視されてきた。しかし、あの高度な英語問

題で八〇%以上の正解をおさめた学生が、四年後の卒業時には、まことにあわれな英語力にダウンするのが現状である。国際化が叫ばれ、外国人と意志の疎通をはかることが日常化している現在、彼らのすぐれた語学力を磨き上げ、reading, writing はもとより speaking, hearing の力を十分につけるようなカリキュラムを組むことはむづかしいことであろうか。「同志社の卒業生は語学ができる」といったイメージを定着させることは、大学の個性化、現代学生志向にもつながることである。

都会志向の学生を田辺に引きつけ、八年後に始まる一八歳人口の急減問題や時代、社会の大きな変化に対応しながら、二一世紀に向けて本学が私学の雄として発展していくためには、上述の如き若干の改良、手直しでは到底不十分であろう。専攻、学科、学部、学部の改組、再編を含めた抜本的な改革が考えられねばならない。大学が自らの教育理念にもとづいて改革能力を発揮しえないのであれば、臨教審に見られるように、国家の主導のもとに、外からの改革を強いられるであろう。我々はそのような事態を避けねばならないのである。

今後我国はもとより、世界の高等教育の動向である「開かれた大学」、「大学の国際化」、「大学の個性化・特色化」を実現するためにも、例えば国際関係学部の創設などは如何なものか。国際的視野をもった、創造性豊かな人間の育成、多様化した世界に国際語を自由に駆使して活躍しうる一単に語学ができるだけでなく、日本の文化、歴史、国民性の理解をふまえて、自己のフィロソフィを自国語以外の言語でもって自由に伝えることができる一人物の育成、情報

処理の技術を学び、情報化社会の中で活動しうる能力を備えた人間の育成は、今後の大学の大きな使命であろう。

本学は過去一〇〇年の暖簾に胡座をかくことなく、官学や他の私学ではおこないえない独自の教育・研究がなされねばならない。それらを支える基本理念であり、また私学の独自性の一つは建学の精神であろう。創立者新島襄は「独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用する人物を出さん事」（同志社大学設立の旨意「明治二年」）を目ざし、同志社大学の設立を意図した。

しかるに我国の高等教育は、明治以来、専門家の育成を重視し、そのために技芸才能の陶冶に重点をおき、それらを正しい目的に用いるための良心の陶冶をおろそかにしてきたきらいがある。近代科学兵器や遺伝子工学に見られるように、近代科学が極度に発達し、各種の情報が氾濫する現代こそ、広い視野から物事をとらえ、自らの良心にてらして判断し、行動しうる人間の育成が重要であろう。それはキリスト教主義を教育の根幹にすえ、知に片寄ることなく、徳・体の調和がとれた人間の育成をまっとうし、始めて可能である。新島という「独自一己の気象を発揮」し、「自治自立」しうる人間の育成こそ、同志社創立時の一〇〇年前にも増して現在重要な意味をもつといえよう。

去る六月に設置された中・長期教学検討委員会は、「本学の将来の教育の充実、発展を目標とし、次段階において実現可能な教学体制の検討」を進める委員会であると聞いている。将来の同志社にとって、当委員会の果たす役割は極めて大きいといわねばならない。

注①①日本私立大学連盟編『教育研究改善の道険』p. 30-34

②M・トロー著 天野、喜多村訳『高学歴社会の大学』東大出版会 p.188 頁

③天野郁夫著『変革期の大学像』日本リクルートセンター p. 306-7

④Three Thousand Futures—The Next Twenty Years for Higher Education, Final Report of the Carnegie Council on Policy

扉の写真について

明治十八年六月に別科神学科を卒業し、一年間女学校の教員を勤めたのち、二十一年から二十七年まで同志社図書館司書であった池袋清風の歌会ノートである。扉に「明治十七年一月より六月まで」とあり、朱筆で「六号」と記されている。これ以前のノートは現存しないが、一年に二冊使っているようだから、十五年九月に別科神学科に入学して以後、こうしたノートを用以いたものとみられる。

清風は宮崎県都城（明治維新以前は薩摩藩に属した）の出身で、明治早々に鹿児島医学校に入学したが、病弱であつたうえに西南の役で校舎が全焼する悲運にあひ、英学をマスターして身を立てようとする宿願を果たせなかった。

たまたま京都に同志社英学校があることを知った彼は、鹿児島女子師範学校教員の職をなげうって、明治十三年九月に同志社英学校に入学した。しかし、すでに三十四歳であり、和歌などに時間を割くことが多くて課業は進まず、十五年六月に退学し、その年新設された別科（邦語）神学科に学ぶほかなかつた。

英学に対する悲願にもかかわらず、彼の資質は国学にあつた。祖父清芳が歌人であつたから、早くからその教えを受け、鹿児島医学校時代には薩摩桂園派の歌人たちに交わつて和歌の

Studies in Higher Education, Josey-Bass Publishers, 1980.

⑤大学設置審議会大学設置計画分科会高等教育計画専門委員会「昭和六一年度以降の高等教育の計画的整備について」

（大学文学部教授）

著しい上達をみた。宮中御歌所の主流になる彼らと親交を保ちながら、清風は英学の道を選んだのである。その英学は前記のとおりだが、和歌では教員下村孝太郎らも一目おいていた。寮生に和歌の指導を始めたのは英学校二年生ころらしい。別科神学科時代には京都では広く知られる歌人になっていたが、同志社生徒を中心とする「案山子の舎」を結成したのは、神学科卒業後である。

熱心な弟子の一人であつた湯浅吉郎は、後年、寮での歌会についてつぎのように書いている。

「毎週二十首位作つて、何時も二題であるから、一題三首つ六首選んで互に持寄りそれを清書して一冊の草稿を作つた。勿論作つた人の名は記さず、土曜日の晚七時頃、第二寮の二階に居た池袋氏の前に提出したのだ。そして池袋氏は忽ち朱筆を採つて直し始め、その歌の傍に細評を記し」（池袋清風氏と和歌の研究）、それから古今の和歌について語つたという。扉の写真の薄い文字は、清風の朱筆である。

在学中から寮生の他、新島民治、本閑寺住職三村日脩らも歌の弟子であつたが、図書館時代には教えを請う者が全国に千人以上いたといわれ、野にある桂園派の宗匠であつた。主要著書に『浅瀬の波』初篇、第二篇がある。

（H・K）

伝統と創造

——女子大学の一つの試み——

稲垣定弘

一般に伝統が意識されるのは、ある新規の事態に対して、それが伝統に相応しいとか、伝統にもとるとかの判断に、期せずして行き着く場合においてはなからうか。そのことから理解されるように、伝統は絶対価値として集団を律する判断の基準となる。それは集団における秩序の維持と精神の連帯に強く作用し、独特のエートスを形成する。決して「悪」の要素を持たず、「善」の様相のみを示す。そのことが習慣から区別される理由である。習慣は、集団の認知による形式的現象的側面の無自覚的回復であるが、伝統は、形式を支える内面の自覚的推進によって蓄積される。したがって一度形成された習慣は、事態の進展によって不都合な要素と見なされることも生じてくる。それにもかかわらず、その繰返しが修正されることは少ない。そのため時には vicious circle に墮すこともある。

それに対して伝統は、その形成過程で意志的な取捨選択が行われ、そのため絶対価値としての純粋性が保持される。集団の指導原理はそれによって確認され、新たな営為は、常にそれ以前の枠組から照射され試練を受ける。このようにして培われていく伝統は、常に「善」

であり、したがって依拠するに足るものであり、安心して回帰すべきものと見なされる。しかしながら、伝統は安住すべきものとして外在するのではない。それは集団の個々を結びつける実体的媒体としてエーテルのように存在し、実際には集団の個々に非日常的意識として沈潜する。そのため集団に緊張を与える事態が生じた場合、常に判断の基準としてほとんど瞬時に想起されるのである。

例えば、ある集団の伝統の項目に「自由」が挙げられるとしよう。集団を構成するものの精神には、自由の反対概念である抑圧とか統制とかに対する嫌悪と反発が、根付いているに違いない。そして実際に束縛が生じた場合、それに対して敢然と抵抗が試みられるであろう。その場合、行為へと駆り立てるものはいったい何か。それはまさしく、築き上げられた自由の概念、即ち、義務と責任の自覚の上に立って、集団の行為は自らの意思で決め、他からの強制に服さず、日常的には自他の思想信条を尊重し干渉しないという貴重な価値への信頼と信念である。このような行為から、伝統が自覚され判断の基準が想起されると同時に、行為による新たな価値の創造

が付加される。行為が生み出した新たな経験は、したがって、自由の伝統を一層強靱にすることになろう。

伝統を守るということは、常に果敢な行為を伴うことを知らなければならぬ。所が伝統は、往々誤解されているように、回顧趣味に委ねられる場合がある。それは伝統を、権威ある鑑定を経た骨董的宝物のように、単に高所に掲げて渴仰すべきものとする認識に基づく。伝統はそのような骨董品のように、時間の推移の中からある日突然出現し、丹念な手入れを経て鑑賞し賞翫されるものでは断じてない。かつて有ったものへの安易で無自覚な帰属や自慰的な賛美は、甘美な陶醉を引き出しえても、それは創造に向かう精神と無縁であり、むしろ精神の退歩であり退廃をさえ招く。それとは反対に、かつて無かったものの構築は、伝統というエートスの介在によって、単に前進とか進歩とかいわれる基準喪失の非価値ではなく、人間の営為のうちにあつて、創造という揺ぎないのちの証しを提示するに違いない。

さらに又、伝統はそれを継承しようとする意欲するものにとつて、両刃の剣になることもありうる。なぜなら伝統は、新たな価値を模索する契機として創造に立向かわしめ、集団に自負と熱意による一層の活力と向上を促す反面、同時にそのような伝統への盲目的信奉が独善的な尺度をつくり、限定的な基準を設け、それによつてそこから逸脱と認定するものを排除し、異端視するという chauvinism に陥ることもあるからである。そのような場合、集団は創造の涸渇した自己閉鎖的偏狭にとられ、集団の個々は自己満足的倨傲をさらけ出す。伝統への無自覚的な帰依がその傾向を生み、助長するの

である。したがって伝統に受動的に身を任せるのではなく、伝統を生きるという自覚が何より要請される。伝統に感溺するのではなく、伝統を見守るだけでもなく、伝統を実践することこそ、新たな価値の創造を試みようということを知らなければならぬ。即ち伝統の継承は思弁の中に存在するのではなく、実践的行為を通じて具現するのである。その意味で伝統を語ること自体、容易なことではなく、さらに創造に立向う決意と実践は、実に困難なことといわなければならぬ。

現在同志社は、田辺校地の利用という、同志社百有余年の歴史の中で未曾有の体験を経ようとしている。この時ほど伝統への自覚と創造への決意が問われる時期は、未だかつてなかったといつてよい。同志社は開校以来、御所の北側の環境良好の地域に位置し、そこを中心の拠点として同志社の伝統を培ってきた。確かに伝統が場所と時間の両軸で形成されることに疑う余地はない。したがって場所の拡大は、まさに伝統との自覚的な対話を強制する。ところが場所は、一面、感覚の習慣をも築き上げ、その日常の生活空間の無自覚的な反復が、誤つて地域の墨守こそ伝統の継承に連なるとの錯覚を生む。しかしそこには時間の軸への考慮が欠落しているといわなくてはならない。時間の軸を考慮に入れると、むしろ地域の新たな拡大こそ、築き上げるべき未来の創造の諸形態を強く予感させ、そのことが伝統への自覚を同時に目醒めさせるはずである。伝統の継承とは、伝統を凝結的実体として受渡していくという意味ならば、それは沈滞以外の何物をも生まないであろう。そうではなくて継承とは本来、発展という常に新たな意味ないし価値の付加を伴うべき

ものであることを知らなくてはならない。したがって場所の拡大は伝統の否定ではなくて、むしろ創造を促す契機であり、伝統の活性化に資するものである。このような視点を何より確認しておくべきであろう。

以下具体的に田辺校地の活用による女子大学の創造の方向を、同志社の伝統の一項目であり、校是として掲げられてきた国際主義との関係で述べてみたい。

一般に国際主義といえば、その言葉の本来の意味から、諸外国との対等の相互交流の実質を含まなければならない。所が、従来わが国において国際主義というとき、往々わが国の文化的文明的諸状況を閉鎖的独善的に検討しそれを強く自己主張するいわゆる国粹主義の反対概念として、諸外国の、特に西欧諸国の文化的文明的諸指標の優位を無条件に認め、それを一方通行的に受容して学ぶことによって、優位と見なす西欧精神への可能な限りの接近の営為をその意味としてきた。したがってそこには、わが国の文化や伝統に対する主体的な認識についての無関心ないし無頓着をその属性として感じさせるものがあった。明治以後の日本の近代化の過程を顧みるとき、そこに西欧の文化文明の一方的受容と偏狭な国粹主義との並存を明かに見ることが出来る。それは一方では、ある文明は他の文明を受け入れることによって一層強靱になるという法則どおり、日本を発展へと導く限りないエネルギーを供給しえたが、他方では、その並存が有機的調和的な総合を持たなかったため、例えば第二次世界大戦に向けてのわが国の国家的行為に見られるように、国際的な視野による事態の認識を一举に喪失するという弱点をも内包してき

た。同時にわれわれのいう国際主義の指摘しうる最大の欠点は、いわゆる脱亜入欧主義と同意義であったという点である。われわれはこのような誤りを二度と繰返してはならないと考える。

したがって国際主義の真の確立は、それぞれの国の文化文明の相互理解と相互尊重を通じてしかありえないことを知らなければならぬ。しかしながらこのような自明のことも、思うほど実現していないのが世界の現実ではなからうか。特に西欧は、ここ数百年にわたって築いてきた文化文明を人類史の主流と位置づけ、それを自他に疑う余地のない価値として自負してきた。科学技術、政治経済の諸制度、文学芸術思想の数々など、確かに西欧が開発し、展開してきたものは多い。そのため最近、わが国の科学技術の分野での目覚ましい創意や経済力の強大さが世界に際立つにつれ、西欧諸国はそれを西欧の優位を揺がすものと考え、驚嘆と同時に激しい拒絶反応を時には示すことがある。そこには国際主義という概念とは相容れない西欧第一主義というべきものの一端を感じないわけにはいかな

い。

思うに、世界の諸民族諸国民が築き上げてきた文化文明には、本来何の優劣もない。あるのはただ相違のみである。その相違を認め、相違の基底にある精神の諸相をあきらかにし、それによって摂取すべきものは摂取し、共存競争に任ずべきは任ずという寛容と理解の精神を互いに確立するよう努力することが、真の国際主義に徹する道であろう。西欧精神がその優位の幻想を自ら打ち砕き、非西欧圏への対等の接近の試みが、確かに近時あらゆる分野で不十分な

けではなく、またわれわれ自身が、西欧精神の一方的受容に汲々とするのではなく、われわれの文化文明の伝統と精神を国際社会の中に主体的に主張し、それが国際間の真の理解と協調に達する道であるとの自覚を積極的に確立していかななくてはならない。

女子大学が田辺校地に短期大学部を設置し、英米語科と日本語日本文学科を開設し、さらに女子大学の組織自体においても日本文化学科を増設し、既設の英文学科に並置して文学部にし、音楽学科は独立の学部にするという構想を持つのは、西欧の文化文明の受容とその有効的な活用による日本の社会の不断の活性化、さらには国際交流への寄与に資するためであるのと同時に、日本の文化文明の正当な姿の積極的な紹介や、少しづつ是正されつつあるが依然としてわれわれの西欧理解と較べて、格段に低い理解でしかない彼ら西欧人の奇妙な異国趣味的興味や偏見の是正に役立つよう、資質と能力の函養を目指すためである。

今ここで謙虚に省みると、われわれの側にも彼らに誤解を生ぜしめる自己規定があるのではなからうか。われわれは、外国人、特に西欧人が日本語を理解し、流暢に話しますといかにも驚嘆する。そこには日本語が世界の言語の中でも特異であり、難解なものであるとの先入観が働いているのではなからうか。日本語は、あくまで世界の言語の中の一つの言語であるという単純な相対化こそ先ず必要である。例えば「言霊」思想にみられるように、言葉と魂の一体化による日本語及び日本人の精神の特殊化ないし神秘化は、日本文化の一面面として論じられるべき課題であって、日本語自体の特性ではない。日本語は特異であり、その日本語を話す日本人、さらに日

本人が作り上げてきた日本の文化や文明は、西欧人にとって理解しがい特殊なものであると考えるのは錯覚にすぎない。このように、世界の諸文化の中で日本の文化を相対化する視点をわれわれ自らが堅持することから先ず始めなければならない。

女子大学が新たに日本文化学科及び短期大学部の二学科を構想するのは、以上のような考察に基づくものである。それは日本文化ないし日本語日本文学を自立的閉鎖的な検討対象としてではなく、世界の文化、世界の言語、世界の文学の中の相対的な価値体系として、日本の文化現象を研究し教授しようという意図に他ならない。もちろん具体的なカリキュラムの中では、先に触れた脱亜入欧主義の少なくない是正の試みもなされていることを付言しておきたい。

さらに同志社の歴史を顧みると、同志社女学校専門部と称した時期の大正元年に、国文科の設置を申請して許可されている事実がある。「京都八古今文化ノ遺跡多ク加フルニ山水ノ美アリ国文学修ノ地トシテ適当ノ場所ナル事」を挙げてその設置の理由の一つにしているが、実質的な開講はなく、いわば幻の学科に終わっている。それ以来七十数年後、国際化の進む社会の諸状況の変貌のなかで、今新たな構想による日本文化学科及び短期大学部日本語日本文学学科の設置を思うとき、当時の設立の精神の幾ばくかを汲み上げることができると感慨を覚えるものである。

女子大学の田辺校地利用のこのような構想の実現は、同志社の伝統への自覚と、新たな価値の創造を思う意志との強い結合によってのみ可能であることを強調しておきたい。

(女子大学教授)